

東京の羽根

小川未明

青空文庫

東京のお正月は、もう梅の花が咲いていて、お天気のいい日は、春がやってきたようにさえ見えるのであります。義雄さんは、隣のみね子さんと羽根をついていました。みね子さんは、去年学校を出たのでした。きょうはお店の公休日です。叔母さんのお家へいつてきたといつて、きれいな着物を着ていました。義雄さんは、まだ来年にならなければ、学校を卒業しないのであります。

「いいかい、こんど落としたり罰に、たたくのよ。」

「義雄さんこそよくつて。さあ上げてよ。」と、みね子さんは、ポンと羽根をたたきました。打ち方がよくなかったので、羽根が横へそれてしまいました。

「あ、ごめんなさい。」と、みね子さんは、おわびをしました。が、義雄さんは、素早く走って、その羽根を力まかせに打ち返しました。けれど、羽根は、みね子さんの方へはいかず、往來の方へ飛んでゆきました。ちようど、そのとき一台のトラックが走ってきたが、羽根は、そのトラックの上の荷物の蔭に落ちて、トラックは、知らずにそのまま羽根をのせてかなたへいつてしまいました。

「いいよ、僕、新しい羽根を持つてくるから。」という義雄さんの声を、トラックの上に

乗つてしまつた羽根はうしろの方できいたのであります。

「いったいおれは、これからどうなるのだらうな。」と、羽根は、思つたのです。

そのトラックは東京から砂糖の荷を積んで田舎の町へいくところでした。その田舎のお正月は、なんでも東京よりは一月おくれて、これからその町に住む人たちは、お正月の用意にとりかかるのでした。

羽根は、車の上からさびしい霜枯れの野原を見ました。田圃の間を通る道は霜解けがし

て、ぬかるみになっていました。笠をかぶった人や毛布を着た人々が、トラックがくる

とあわてて道を開いて、どろのとぼしりをかけられまいとして、うらめしうに見送るの

でした。並木の頭に止まつたからすがこの有り様を見下ろしていました。羽根は、なんだ

かからすが、自分を「どこへいくのだろう。」と、じつと見ているような気がしました。

「からずさん、私をもう一度都へつれていってくれませんか。」といって、頼もうとする

まに、トラックは、走つて、からずは後ろになつてしまいました。

あちらの山々には、真つ白の雪がきていました。昼過ぎに、トラックは、小さなさびしい町の問屋の前に止まりました。問屋の人たちが出てきて、荷物を下ろしました。運転手も車から下りて、荷物を下ろすてつだいをしました。このとき、白と赤のまじつた

羽根^{はね}が、荷^にの間^{あいだ}から出てきました。

「やあ、どこで、こんなのが乗^のったかな。」と、眼鏡^{めがね}をかけた、運転手^{うんでんしゅ}は笑^{わら}って、ポンと往来^{おうらい}に投げ^なました。

羽根^{はね}は、ちようど都^{みやこ}の空^{そら}で、義雄^{よしお}さんと、みね子^こさんに突^つかれて、ひらひらと空^{そら}に翻^{ひるがえ}つて落ちたときのようになかつこうで地面^{じめん}へ落ちたのでした。

往来^{おうらい}では、勇坊^{ゆうぼう}と時子^{ときこ}さんが、寒そうに懷^{ふところ}手^てをして遊^{あそ}んでいましたが、羽根^{はね}が落ちてくるとすぐに二人^{ふたり}は、走^{はし}り寄^よりました。

「東京^{とうきよう}の羽根^{はね}だ、二人^{ふたり}でついて遊^{あそ}びな。」と、運転手^{うんでんしゅ}は、笑^{わら}いました。

「東京^{とうきよう}の羽根^{はね}だつてさ。」と、時子^{ときこ}さんは、目^めをまるくして、なつかしように手^てに持^もった羽根^{はね}を見^みつけました。

「東京^{とうきよう}は、お正^{しょう}月^{がつ}なんだね、この自動車^{じどうしゃ}は、東京^{とうきよう}からきたんだ。」と、勇坊^{ゆうぼう}は、どろのはねが、おびただしくついたトラックを物珍^{ものめず}しそうにながめました。

「私家^{わたくしえ}へいつて、羽子板^{はこいた}を持^もってくるわ。」

時子^{ときこ}さんは、二つ羽子板^{はこいた}を持^もってきました。二人^{ふたり}は、羽根^{はね}についていました。すると、近所^{きんじよ}の子供^{こども}たちが集^{あつ}まってきた、

「もう、羽根はねについているの？」といって、きました。

みんなは、かわるがわる、その羽根はねについて遊あそんでいました。そのうちに、羽根はねは、どうしたはずみか屋根やねの上うえへ飛とんで、といのちなかに落おちてしまいました。

「あ、どこへいったらう、見えなくなつたわ。」

「といのちなかの中なかへ落おちてしまつたんだ。」

子供こどもたちは、さおを持つて来きましたが、羽根はねは中なかへ隠かくれて、下したからは見えませんでした。子供こどもたちが、あきらめて散ちつてしまつた時じぶん分ぶんには、自動車じどうしゃの姿すがたも見えなかつたのです。寒い風さむかぜが吹ふいて、なんとなく雪ゆきの降ふりそうな空模様そらもようでありました。

「ガア、ガア。」と、あちらの森もりの方ほうで、からすの鳴なき声こゑがしていました。

だれもいなくなると、どこからかからすが飛とんできて、羽根はねをくわえてゆきました。

「あ、さつきのからすさんですね、私わたしを東京とうきょうのお家うちへつれていってください。」と、羽根はねは、たのみました。けれど、からすは、羽根はねのいったことが耳みみに入はいらなかつたように遠方えんぽうの森もりの中なかへ飛とんできて、いちばん高い木きの頂いただきにあつた、自分じぶんの巣すの中なかへ持つてきました。羽根はねは、生うまれてからこんな高いところへ上あがつたのは、はじめてです。

東京とうきょうにいる時じぶん分ぶん、羽子板はこいたで打うたれて、空そらへ舞まい上あがるたびに、もっと、もっと高く、

あの茜色あかねいろの美しい空うつくへ上そらがることができたらと、高いところにあことがれたことがありました。いま、その望みのぞがかなったけれど、あまりにもさびしいのです。羽根はねは、木の頂きただきから、四方ほうの景色けしきをながめていました。寒い風さむかぜが、ややもすると羽根はねをさらっていきそうです。この後のち、羽根はねは、どうなるでありますようか？

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「東京《とうきよう》の羽根《はね》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年12月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

東京の羽根

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>